琉球大学学術リポジトリ

沖縄県海外協会機関誌『南鵬』『雄飛』の発刊・継続とその内容の考察(1)

メタデータ	言語:
	出版者: 沖縄地理学会
	公開日: 2018-11-16
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 石川, 友紀
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002017690

沖縄地理　第 16 号
107–122 頁　(2016)

Okinawa Journal of Geographical Studies
No.16, p. 107–122　(2016)

沖縄県海外協会機関誌『南鵬』『雄飛』の発刊・継続とその内容の考察 (1)

石 川 友 紀
(琉球大学名誉教授)

Ⅰ　はじめに

第二次世界大戦前の大正末期 1924 年（大正 13）11 月に，沖縄県内において，長年の懸案であった沖縄県海外協会が発足した．海外在住の県出身移民の強い要望により，また，県内在住の関係者や県の後援により実現したものであった．同協会設立の目的は海外移民の保護援助，知識の普及，海外在留者との連絡，海外に必要な人材の養成等であった．

同協会創設 1 年後の 1925 年（大正 14）12 月に機関誌『南鵬』創刊号が発刊された．それは同協会規則第 3 条第 3 項に「会報ヲ発行ニルコト」と義務付けられ，その編集者には協会設立発起人の一人でもあった又吉康和があたった．以後,『南鵬』は創刊号（第 1 巻第 1 号）の続刊として 2 号（第 2 巻第 1 号）が 1926 年（大正 15）12 月，3 号（第 3 巻第 1 号）が 1927 年（昭和 2）8 月に発行された．

戦後 1948 年（昭和 23）に沖縄からアルゼンチンへの移民が再開されたのを契機に，海外協会再建の声がおこり, 同年 10 月沖縄海外協会が発足した．同会の名称は 1953 年 5 月に琉球海外協会，1961 年 8 月に再び沖縄海外協会，復帰後 1973 年 4 月に沖縄県海外協会と変遷していった [1]．そして，同海外協会は 1989 年（平成元）3 月末日をもって解散した．その間，沖縄県海外協会は 1924 年の創設以来太平洋戦争中は休止したが，66 年間も存続したことになる．同協会の業務は日本復帰に伴い，その前後より海外移住事業団（のち国際協力事業団）と沖縄県，1981 年（昭和 56）以降沖縄県国際交流財団に引き継がれることになった [2]．

戦後再発足の沖縄海外協会の機関誌『雄飛』は同協会再建後 3 年目の 1951 年 11 月に創刊号が発行された．その後 42 年間の存続中に第 44 号（1989 年 2 月刊）まで 44 冊と，特集号．特別号が 4 冊計 48 冊発行された．

本稿では県内で発行された沖縄県海外協会機関誌の戦前版『南鵬』発刊の意義，同創刊号・2 号・3 号の主要な内容の概観，ついで，戦後版『雄飛』発刊の意義，同創刊号～第 44 号の主要な内容の概観について考察してみる．戦前・戦後とも移民問題が重要視されていた沖縄県にあって，このような移民関係の歴史的資料の発掘は,「移民遺産」と称してもよいものではなかろうか.

Ⅱ『南鵬』発刊の意義と内容

1.『南鵬』発刊の意義

沖縄県海外協会が創設されて 1 年後, 1925 年（大正 14）12 月 25 日発行の機関誌『南鵬』創刊号に，編集者の又吉康和は次の巻頭言としての「本誌発刊に就いて」のなかで，つぎのように発刊の趣旨を述べている．

> 本誌は我が同胞が海外発展の基礎を拓くべく，国際道義の涵養に資する機関たらしめたいと期してゐる．而して号を重ぬるに隋ひ，在外諸君は座して懐しき故郷の風光に接することを得，在郷諸君は天涯萬里の消息を詳にすることを得たいと期してゐる．われ等は本会の目的とする所に理解あり，且つ同情ある内外識者の援助に與りたいと念じて居る（1 頁）.

沖縄県海外協会発起人の一人でもあった又吉康和は『南鵬』創刊号の「編輯後記」のなかで，以下のように，同協会設立に尽力されたアメリカ合

衆国在住の太田蒲戸氏と平良新助氏の功労に感謝し，『南鵬』の表題は県知事で同協会会長の亀井光政の揮毫によるものであると，次のように記している．

在米太田蒲戸氏並に平良新助氏等本会設立の為めに一方ならぬ御尽力下さったことを改めて感謝の意を表して置きます．尚ほ表題『南鵬』は亀井会長の御揮毫に係るもので併せて謝意を表して其の記念としたいと思ってゐます（105頁）．

2.『南鵬』創刊号・2号・3号の主要な内容の概観

1)『南鵬』創刊号（第1巻第1号）内容の概観

創刊号の様式は発行年月日が1925年（大正14）12月25日，発行所が沖縄県海外協会事務所，編輯者が又吉康和，印刷所が大同印刷（熊本市），総頁が105頁，口絵（写真）がある（2号以下へは簡略化す）（図1）．

本誌の内容をみると，論説・資料・通信・随筆・俳句・短歌・狂言などが数多くみられ，実に多彩である．以下，その内容から海外移民に関するものと，それ以外のものとに分類し，うち重要と思われるもののみについて，内容の解説を試みる．まず，目次を列挙する．

図1 『南鵬』創刊号の表紙

△海外移民に関するもの

①（巻頭言）本誌発刊に就いて（又吉生）
②亀井会長挨拶――総会席上に於て（亀井光政）
③沖縄県海外協会主意書
④善良なる人物を送れ（副会長　羽田格三郎）
⑤海外協会の活用――政策と結び付けよ（沖縄朝日新聞社長　當眞嗣合）
⑥移民と社船（大阪商船那覇支店長　大津久之助）
⑦海外移民の選択――過去の失敗に鑑みて教養ある移民を望む（法学士　仲村権五郎）
⑧移民問題の悲しい現実――何故に沖縄移民は排斥されるか（沖縄朝日記者　長嶺将快）
⑨海外協会設立まで――大正七年頃より提唱された
⑩海外時報の発刊を祝す（在米加州ブロレー宮城善太）
⑪祝沖縄海外協会設立（在米　宮城與整）
⑫布哇海外協会の招聘に応じ，渡布したる太田翁
⑬海内海外　六万移民の後援会，会員二萬広島に生る（ほか10記事あり）
⑭通信（北米南加州沖縄県人会長　太田蒲戸）
⑮沖縄県海外協会規則
⑯沖縄県海外協会寄附者芳名
⑰（移民表）外国渡航許可人員調
⑱編輯後記

△海外移民以外のもの

①ベ―シル，ホール渡来に関する琉球側の記録（県立図書館長　眞境名安興）
②沖縄の俚諺とデモクラシー（文学士　伊波普猷）
③電信の発達と其の利用法（那覇郵便局長　天野榮十郎）

④教育の現状―内容は著しい進歩
⑤各都市の現状（上）――現今の島尻郡，国頭郡の現勢
⑥俳句――冬（鶴田大泡）（ほか 3 句）
⑦短歌――故里は貧し（江島寂潮），五穀豊壌の画讃をたのまれて（山城正忠）
⑧親母狂言（チエンバーレン氏の英訳つき）

以上の項目のなかで，海外移民以外のものを除き，海外移民に関するものの中から，若干の解説を行いたい（句読点は引用者より付したものがある）．

⑦仲村権五郎の「海外移民の選択」は，長年アメリカ合衆国本土に在住し，沖縄県出身移民，ひいては日本人移民の指導者であった仲村が自己の体験を踏まえ，移民の必要性を県移民一世のあり方，心構えを説いたものである．以下，かれの意見を聴いてみる[3]．

私は沖縄県内にあり余る人口を県外に移住せしめ，海外に送り出す事によりて，目下人口過剰の為めに苦しみ悩みつゝある人口問題を或る程度迄緩和し調節し得るのみならず，海外移民の送金により県経済界に寄与する所少少でないと思ふが故に，海外移民の将来に就き聊か所見の一端を述べて見たい（29 頁）．

不幸にして過去に於ける県出身の移民は，其の教養に於いて他府県出身の移民に比し遜色があった．恐らく今日と雖もさうであらう．我県民の多数の中には無礼なる言動を敢てして，恬として恥ない者があった．又誠に不体裁極まる服装や変な動作の為め，啻（ただ）に外人に奇異なる印象を与へしのみならず，同胞移民よりも擯（ひん）斥され，侮蔑を受ける者もあった．

其の甚だしいものになると，他人より軽侮されても何等の痛痒を感ぜない者があった．（中略）比の如き醜態を演じられては甚だ困る．他の県人は非常に迷惑をする．何んとかせねばならぬ．只拱手して傍観して居るに忍びないとは，よく心ある県人の異口同音に言ふ所のことである．されど，唯口に唱へるだけでは何時までたっても実績は少しも挙らない．唯徒らに彼等を責め，悲憤慷慨するに止らず，彼等の朦を啓き，彼等の向上発展を期すべく，親切に指導する所があらねばならぬ（以上 30-31 頁）．

このような県移民の状態を改めるには，移民個々の自覚に待つとともに，世の識者・先覚者・当局者等によって啓蒙を行う必要があるとし，そのために，移民指導機関としての移民講習所の設置を，つぎのように訴えている．

それは移民講習所の設置である．是れは何も別に新しき場所に講習所の場所を設ける必要はない．那覇市と相談して小学校々舎を借用するか，又は官衙を利用して移民の為めに講習会を催す事である．是れは容易に実行の出来ることである．講習科目の如きも，理想を云へば其の数が極めて多い．又講習期間も欲を云へば長い程それだけよい．然し，それには実行難が伴ふ．故に私は差當り極めて僅かの講習科目を選定し，移民出発一週間前に四五日間教授する事を慫慂したい（31 頁）．

⑧長嶺将快の「移民問題の悲しい現実」はこの副題に「何故に沖縄移民は排斥されるか」とあるように，本文はブラジルとフィリピンにおける県出身移民に対する排斥の実態が 17 頁にもわたり，実に詳細に論評されている．この論説については，以後出版された湧上聾人編『沖縄救済論集』（1929 年刊）に再録され，むしろこの文献が引用されることが多くなった[4]．その概略を記すと，1925 年（大正 14）7 月 11 日発行のフィリピンにおける現地邦字新聞『商工新報』の沖縄県出身移民に対する非難，及びブラジルにおける邦字新聞『日伯毎日』の同年 8 月 21 日発行の県移民非難の記事を取り上げ，つぎのように記している．

斯の如く，一は東国の南方に，一は西国の南方に相前後して沖縄移民排斥の声を聞く．実に悲む可き現実では無からうか．然かも沖縄移民

の一挙一動が外侮を招く原因となり，延いては日本移民全部の信用と声価を失墜させる素因となる呉れがあるから，沖縄移民の渡航を禁止すべしとの激越なる論難を浴びせられる，といふ事は実に我沖縄民族の興亡に関する重大問題にして，被非難者の立場に在る我等沖縄民族の大に猛省すべき事柄では無からうか（37-38 頁）．

このように，『沖縄朝日』の長嶺記者はなげき，ついで，ブラジル移民の治革，外交官（在サンパウロ）の沖縄移民観，フィリピン移民の沿革，移民政策の樹立が急務の順に詳細に記述している．この最後の項目で以下のような結論を，意見として述べている．

斯く観じ来れば，移民政策上より観たる沖縄の現状は正に累卵の危にあるといふも，穴勝誇張した言辞ではあるまいと思ふ．之れが対策に就いては県内に在ると海外に在るを問はず，沖縄民族自からが其欠陥を自覚して之れを矯正し，今後の対外的立場を有利な位置に築き上げる努力が，今日最も必要な解決の手段であらうと信ずるのである．それには今後の海外渡航者は相当条件を附して旅券を下附する方針を執ることにしたいものである．尤も再渡航者や或は海外生活に一応経験ある者は例外として，新規の渡航者には是非とも左の制限を設け，出稼者それ自身の素質を向上させなければならないと思ふ．（そのためには）

一，海外渡航者は義務教育を了へ，自から手紙を認め得る学力と普通語を解し得る能力を有する者たること．二，渡航者に対しては少くとも一ヶ月以上渡航先に関する智識鼓吹の講習を授けること．三，渡航先には指導員を設け，出稼者の欠陥を矯正すべく絶えず指導を為すこと（48-49 頁）．

沖縄県の移民政策に対し，長嶺は上記 3 項目をあげ，ついでこれを実行するに当っての県体的事例を示し，つぎのように結びとして警鐘を鳴らしている．

之れを要するに，移民問題に対する本県の現状は全く無方策のまゝ放任し，単に身体検査のみ行ふというふ程度に過ぎざる状態なれば，この際速に之れが方策を確立し，以上の如き素質向上の人為的手段にても講ぜざるに於ては，益々非難と排斥の声を広め，沖縄民族の前途に一層悲む可き大な暗影が覆ひかぶさるゝのも遠き未来のことではあるまいであらう（49 頁）．

このほか『南鵬』創刊号には多くの有用な論考・資料等もあるが，枚数の関係で海外移民に関するものの中で，⑨「海外協会設立まで」⑮「沖縄県海外協会規則」⑯「沖縄県海外協会寄附者芳名」⑰（移民表）「外国渡航許可人員調」がとくに重要な資料として役立つことを指摘しておこう．

2)『南鵬』2 号（第 2 巻第 1 号）内容の概観

2 号は 1926 年（大正 15）12 月 15 日発行，沖縄県海外協会事務所，又吉康和，大同印刷（熊本市），78 頁，口絵（写真）．

△海外移民に関するもの

①（巻頭言）沖縄開発の一端を述べて（沖縄県海外協会会長　今宿次雄）

②本県海外移民の先駆者――故當山久三氏の奮闘史（沖縄タイムス記者　伊芸冠瑞）

③移民取扱ひ問題――海外協会の活動を望む（県会議員　伊仲 浩）

④ハワイと沖縄との関係（太田朝敷）

⑤伯国移民渡航者解禁――無限の沃野県人を待つ，當分試験的更に移民の自覚を要す（赤松総領事）

⑥（雑録）郷土通信，故里に帰りて布哇を思ふ（上江洲芳子），琉球民族の面目（昇 曙夢）

⑦（雑録）海外通信　常識のない沖縄移民――普通語が話せないのが原因（比律賓島ダバオ州森田孟衍）

⑧（雑録）　沖縄移民の悲痛なる立場――母国と

連絡を取りて善処せん（ペルー沖縄県人会長　金城新元）

⑨（雑録）　郷土救済の根本策は海外発展（上海　三井洋行　伊豆見元永）

⑩本会日誌

⑪（移民表）各府県別海外渡航許可人員調（大正十四年中）

⑫本会寄附者芳名（7 個人・1 団体）

⑬編輯後記

△海外移民以外に関するもの

①中山興亡史――附海外交通（又吉生）

②各都市の現状（続）――中頭郡大観

③（雑録）郷土通信　銀行破綻・経済振興会・沖縄県救済・那覇港拡張・体育協会・養蚕の奨励・現在の県会議員・古琉球の研究，紅茶の後一鳥さし小橋川のことども

④（俳句）雑詠（辻本正一），久米島の句（鶴田大泡）

⑤（短歌）秋晴れ（国吉瓦白），雲の去来（牛島軍平），歌日記より（山城正忠），莨一ニヒリストへの贈り物（山之口獏），風景短章（国吉灰雨）

⑥（感想）光塵録（新崎宙絃）

⑦（創作）風火仙一嘘か眞かしらないが，唐話――（山城正忠）

⑧（組踊）花売の縁――一名森川の子（作者高宮城，又吉記す）

海外移民に関するものとしては②伊芸冠瑞の「本県海外移民の先駆者――故當山久三氏の奮闘史」は，當山久三の伝記を詳細に記したものであり，戦後出版された当山久三伝記編纂会編・湧川清栄著（1953）『時代の先駆者當山久三伝――沖縄現代史の一節――』（ハワイ・ホノルル市で出版）にも引用されるほど貴重な文献となった．しかし，7 頁に及ぶ本伝記には若干の事実と相違する文節もみられる[5]．

③伊仲　浩の「移民取扱ひ問題」は 3 頁ではあるが，副題が「海外協会の活動を望む」で沖縄県の移民政策に対して，思い切った批判を行っているので，その一部を引用してみよう．

沖縄は土地狭隘且つ人口調密なる上に，見るべき何等の事業がない為め，海外移民又は県外出稼が近来著るしく増加して来た．是れ本県に取って洵に結構なことゝ云はねばならない．さりながら大正十二の統計を見ると，外国移民の数が男女合せて二萬五百六十六人で，其の送金高が八十六萬千二十八円である．之れを月割にすると一人平均僅かに三円四十八銭の少額に過ぎぬ．斯くの如き状態では渡航費の利子にも足らぬではないか．外国移民さへ然りである．県外出稼者が果してどの位の活動をしてゐるか，吾輩は之れに対しては充分なる調査研究の必要ありと認むる（9 頁）．

一体出稼に行くものゝすべてが，移民会社の手を経ねばならぬ為，非常なる手数と不正の金を捲き上げらるゝ事は吾輩の屢々耳にする処である．若し移民や出稼者のすべてが営利会社たる移民会社の手を経ずに直接渡航出来る方法があり，之れに依り暴利を防止することが出来たら県全体の利益は実に莫大なるものであることは常識的に考へても，之れを想像するに難くはない．蘇鉄地獄などと心細い事を訴へるよりは，県社会課などが移民の捲き上げらるゝ不正の金を食ひ止める方法を講ずる事が急務中の急務であると確信する次第である．殊に移民地の状況等を常に調査し，彼れ等をして有意義に活動せしむる事は県としてなすべき緊急事業の一つであり，又県民の貴き義務であらねばならぬ（9 頁）．

そこで，伊仲はつぎのように創設後間もない沖縄県海外協会の役割として，手数料の多さに苦しんでいる移民に対して，同協会は移民社会に代わるべき組織であると主張する．

若し吾輩の主張する如く，海外移民取扱ひ方を海外協会の手に委ねることが出来たら，移民の消費する渡航費の十分の一で協会費用は維持出来ることであらう．而して移民は，亦暴利を搾取さるるゝことなく，安全に渡航することが出来る．殊に協会に於て大々的活動を為し，移

植民地の工場や会社などと直接交渉の任に當るとするならば，移植民の品質を向上せしむることも出来るし，又工賃の如きも有利に解決することを得て，沖縄移民の声価を揚ぐる事容易ではなからうかと思ふ（10 頁）.

④太田朝敷の「ハワイと沖縄との関係」は太田が布哇沖縄海外協会の招きにより，ハワイにおいて大正 14 年 7 月から同 15 年 5 月まで 10 か月にわたり，県出身移民の実態を見聞してきての報告ではあるが，出色の論説といえよう．その記述はハワイに於ける日本人，ハワイに於ける沖縄県人，沖縄県人の活動状況，子弟の教育と二代目の県人，日本人間に於ける県人の位置の 5 項目の順に記し，本文も 8 頁に及ぶ．以下，その一部を取り上げてみる[6].

数年前から合衆国の移民法が実施されたので，今日では再渡航者の外全く途絶して居るが，そのかわり在留者の八九割は相当の家庭を造って居るので，年々生れる子供が少くはない．今日ハワイ全島に於ける我が沖縄出身者の戸口は，正確のところは分らないが，戸数が四千内外，人口が一萬七八千乃至二萬と推定されて居る（13 頁）.

数年以前までは子供が学齢に達すると，教育の関係を顧慮して郷里に帰すものが随分居たが，之は，畢竟早晩引あげると云ふ考へから出たのである．然るに今日は永住の決心をもつものが多くなるに隋ひ，彼の地に於ける教育にも注意を払ひ，隋つて見るべき成績を収めた子弟も輩出して来る．ホノルゝにはハイスクール以上の学生等が組織した，沖縄学生会と称する団体があるが，会員が約七八十人の多きに達して居る．この団体は男子だけであるが，既にハイスクール程度の学校に在学中の女子も可なり居るし，卒業して相当の職についた女子も数人居る．小学校に通ふものは，何れのキャンプに行って見ても，実に驚くほどの多数で，学齢に達した子弟にして学校に出ないものは，先ず絶対にないといふてもよからう（15 頁）.

ハワイの教育施設はどんなものかといふに，小学校は八年制で，その上に四年のハイスクールがあり，その上にノーマル，スクール（二年）と総合大学があり，この外に各種の職業学校や感化院や，不具者を教育する設備などがある（16 頁）.

最後の節で，太田はハワイの沖縄県出身移民が生活や教育も向上し，特殊な風習も改め，人材も輩出してきているので，日本人移民のなかでもその地位が認められつつあるが，南米の県移民はいまだその感があるとむすんでいる．

ハワイ抔では前にも云ふ通り，本県人の生活や教育も向上し，特殊の風習も自ら改まり，且つ相当に認められたものも輩出すると云ふ状態で，今日では日本人中で押しも押されもしないと云ふ位置にあるが，南米辺では今尚ほ新渡航者に対する苦情が絶へないやうだ．県外に出るにも，海外に行くにも，日本人としての相当の常識を有って居ないと，ただに本人に取って不利なるのみならず，先進者に迷惑をかけるやうな事が，多々起らぬとも限らない（19 頁）.

（雑録）のなかの「海外通信」としては，フィリピンやペルーの沖縄県出身移民からの通信が取り上げられている．

⑦フィリピン・ミンダナオ島ダバオ州在住の森田孟衍の「常識のない沖縄移民」は県移民の短所は普通語の不如意，常識の欠如であると指摘する．また，無学者の渡航を戒め，移民周旋業者や県海外協会の役割，身体検査等移民選定に当っての意見を述べている．

⑧ペルー沖縄県人会長の金城新元の「沖縄移民の悲痛なる立場」はペルーにおける県移民の実態を述べ，ついで渡航する場合の移民の条件として 5 項目を取り上げ，その理由書も付して県海外協会を通して，県当局へ善処方を要請している．このうち，ペルーの県移民の実情をみてみよう．

當秘露に於ける我が県人状況は，数に於て在留邦人の三分の一以上を占め，邦人一萬余人の内四千余が我が県人として，数にて殊に首都リマ市及秘露国の門口たる（カイヤオ市）カイヤオ港の町に於ける商業従業者の約半数は我が県人之れを占め，数に於て他の何れの県人の及ぶ所にあらず候．然るに當秘露に於ける県人の状況は，他の移民地に於ける如く大同小異にて，教育程度の低きの然らしむる所が，経済的には勢力あるも，常に他県人に排斥せらるゝ如き傾向にて，當秘露国人に於ても沖縄なる名称は日本に於ける極めて文化の低き地方人なりとの観念を与へ，沖縄は日本国の尤も未開なる地方の名称と相成居候（47 頁）．

⑩「本会日誌」は県海外協会の活動状況が詳細に記されている．

⑪（移民表）「各府県別海外渡航許可人員調」は 1925 年（大正 14）現在の出移民数が把握できる．男女別と移民取扱ニ依ル者，同依ラザル者別の区分もあり，出移民数の総計をみると，沖縄県は 2,453 人で全国 1 万 0,696 人の 22.9%をも占め，全国一位であった．末尾の 4 頁は那覇市西新町在の比嘉海外渡航者・移民周施事務所（比嘉善道），移民取扱人・海外興業株式会社（業務代理人　亀井捨之助，海外渡航周旋業　亀井捨之助），海外移民周施業（徳田安敦・徳田安栗）と神戸市元町 6 丁目在の指定旅館岩国屋旅館本店の広告がみられ，当時の民間の移民周施業者や旅館の存在が知られ興味深い．

3）『南鵬』3 号（第 3 巻第 1 号）内容の概観

3 号は 1927 年（昭和 2）8 月 1 日発行，沖縄県海外協会事務所，又吉康和，大同印刷（熊本市），48 頁，口絵（写真）．

△海外移民に関するもの

①（巻頭言）会長送迎のことば（又吉）
②郷土に帰りて（宮里貞寛）
③秘露に於ける成功者　屋宜松氏の帰郷――孤立無援の海外で，奮闘努力酬いられて巨萬の富を積む
④第五十二議会を通過した海外移住組合法に就て――海外移住者の福音――
⑤海外移住組合組織事業及助成方法ノ概要
⑥県下各小学校合同研究会――女子師範学校主催，沖縄海外協会後援
⑦海外通信：ペルー県人会長山川宗道，付：移民十戒――秘露渡航移民の心得――
⑧本会日誌
⑨会費納附者
⑩（移民表）海外在留者送金調（国別・年別，大正 11 年～同大正 15 年・昭和元年）
⑪編輯後記（又吉生）

△海外移民以外のもの

①大根畑の家（牛島軍平）
②離村の農夫（素描一幕劇，上里春生）

海外移民に関するものとしては，②宮里貞寛の「郷土に帰りて」は，沖縄県海外協会設立時の発起人の一人で，『南鵬』の編集者であった又吉康和への便りをまとめたものである．その内容はハワイにおける県移民の実情を伝えるとともに，県人 60 万人に対し，郷里へ帰った時の感想や意見が述べられている．

布哇には二十年或は其れ以上居て，未だ一度も郷里の土を踏まない同胞が沢山あります．其の事情は多様にして同日に論ずる事は出来ないが，其の最大にして最も多い理由は「目下の布哇は物質的に余り恵まれず，加之生活様式の向上や家族の増加により生活難に悩んで居ります．其れを郷里の関係者は布哇には恰も金の生る木でも有るかの如く考へ，ナンボナンデモ二十年も布哇に居れば金の三千や四千は持って居るだろ」位に心得て居る．比の心理作用が禍して空手で所謂一文なしで帰る事を躊躇させる．郷里の血族は口では殊勝らしく申します．「金は要らぬ身体一つ持って来て丈夫な顔を見せたら沢山だ」と．けれども布哇に居る身になって見れば，

錦を飾らなくてもよいが，セメテ家族の者や親類の者に御茶代位の用意が無ければ会す顔が無いと思って居る．無理のない考え方であらう（4頁）．

布哇に於ける県人の家庭は普通夫婦に小供五人即ち七人平均位であります．其七人の糊口が主人一人の手によって凌がれて居ります．耕地労働者の月収四捨弗乃至五捨弗と見た場合，負債をつくらずに充分に生活して行く事の出来る家庭は寧ろ恵まれた方であります．衣食住と生活費の外，交際費，教育費，社会公共事業の寄附金等政謂出費多端で，如何にして借金せずに其日を暮して行くかが，現在の布哇在留十三万同胞大多数の叫びであります．斯る状態の下に苦悶して居る同胞が郷里を訪問すると云ふ事は確かに難問題たるを失ひません（4-5頁）．

私は切に在布同胞にお願ひする．今や見栄を張る時では無い．本當に一文無しでよろしい．往復の旅費丈けの用意をして老ひたる父母或は兄弟姉妹の存命中，一度丈け郷里を訪ねて下さい．暫くの間其空気に浸って下さい．故郷の山や川，故山の自然は両手を拡げて諸君の帰りを待って居る．諸君の老いたる父母は朝も昼も夕も夜も思ひ出す暇無き程，四六時中諸君の帰りを無条件で待ち望んで居る．同時に私は切に故国に在る親戚知友に御願する．何卒布哇に居る諸君の子のため，孫のため，兄弟姉妹のため，彼等に物質的何等の期待を持たないで下さい．其れが単なる御世辞で無くして，ホントに真心から彼等に一文無しで帰る事を望んで下さい（5頁）．

③又吉同誌編集者の「秘露に於ける成功者屋宜松氏の帰郷」は県からペルーへ，1906年（明治39）11月にカイヤオ港に到着した初回移民36人のうちの一人島尻郡具志頭間切新城村出身の屋宜松（移民当時30歳）への面接聞き取り調査の貴重な記録である．その一部を以下に紹介しよう．

私は沖縄県から最初の渡航者で，日本人としては第三航海目明治三十九年十月十六日，森岡移民として横浜港を厳島丸で出帆しました．今日は一萬噸以上の定期船で設備も完備し，愉快な航海をすることが出来ますが，当時は三千噸級で設備も不完全，船足も遅く，十日経っても島蔭も見えず，二十日航しても天涯千里の青海原，不安の念と不自由とに萬斛（まんと）の不平を鳴しながらも，三十余日にしてカイヤオ港に着した．其時の喜びは今に忘れることは出来ない．此の時初めて外国の風物に接した訳です．カイヤオ港で寝食のみに数日費し，再び南へと出帆，セルロアスール港でカニエテ耕地行の一隊に別れ，我等の一行は北方チムボテ港を指して，舳を転して航海を続け同港で上陸，直ちにサンタクラーラ耕地へ向ふ．其処には県人三十六名，佐賀県人十四名，都合五十名一隊となって入耕しました（7頁）．

到着の翌日だけ休んで，三日目からは仕事に従事しましたが，耕地と市場との交通は困難であり，且つ支配人の許可書を持たざれば市場へ出ることが出来なかったので，恰度籠の鳥も同様であった．當時我等日本人は殆んど工夫と同様に取扱はれたので，為めに憤慨して労働中止した者さへあった．然し，我等日本男児の仕事の早いことには土人は舌を巻いてゐたものです．今日綿花を採集するに百五十斤摘む者は上の部であるが，當時は三百斤摘んだものです（7頁）．

然し，居室の悪いのと食物の不自由の為め，病人が多く出て，四ヶ月後には半分しか仕事に出ないと云ふ有様，而して我が県人から四人も病死し，更に三ヶ月経つと三人死んで了ひ，入耕後七ヶ月からは恐耕病に罹り，転耕した人も少なくなかった．最初に逃げ出したのも我が県人であった．然し，私は動かなかった（7-8頁）．

⑦「海外通信」としてのペルー沖縄県人会長山川宗道は，ペルーにおける県移民の実態を，県人への差別の問題も含めてつぎのように伝える．

秘露に於ける日本人は年と共に増加を示し，

今やその数一萬二千余人，其の内我が沖縄県人は実は半数以上を突破して五千余人の多数を占め，秘国首府里馬市並に関門たるカイヤオ市両市に於ける日本商人の半数は，これ又県人の経営に係り，着々其地歩を固めつゝある半面には農業地方にも又，それぞれ発展の跡を示しつゝあるが，何分にも我が県人は教育程度が低く，世界人を相手にしての社会生活を遂ぐるには常識を欠ぎ，常に他府県人よりは侮辱的差別待遇を受け，而も此欠点を誇張し悪用して，日本移民の禁止は凡て沖縄県人の所為なりと唱導し，彼等は外国人に接する際には殊更に沖縄なる名称を附して取扱ひ，沖縄人は日本国民の中でも，絶海の孤島の田舎者なりと悪宣伝を放ちて，外国人に悪印象を与へしめ，我県人をして益々特殊的苦境に立たしめるので，血あり涙ある者をして，沖縄に生れたる不遇の境遇を悲ましめると云ふ，悲痛な現状に泣かされつゝあると（27頁）．

同じ日本移民にさへ侮辱的差別待遇を受けつゝある我が沖縄移民の前途には更に大なる暗雲が漂ふてゐる．即ちペルーの都市に在りては最近北米より伝播し来れる黄色人種排斥の声が漸次高まり，この種の主唱者の間には都市に於ける沖縄県人の生活状態を中心として，昨今排斥材料の蒐集に努めて居るが，既にペルーの中産階級以下の労働団体を主体として，近く排斥運動の具体化を見んとする所まで進められてゐるので，帝国公使館並に領事館等はその対策に腐心して居る有様であるので，沖縄県人会でも之れが防止を期する一策として，今後の渡航者には左記事項を厳守せしめるやう教育を施して貰ひたい（27頁）．（以下の移民十戒――秘露渡航移民の心得――は省略す）．

Ⅲ　戦後の沖縄県海外協会機関誌『雄飛』の発刊・継続

第二次世界大戦前1924年（大正13）11月に創設された沖縄県海外協会は，太平洋戦争のため中断し，1948年（昭和23）10月に沖縄海外協会として再発足した．また，同協会の機関誌は戦前の『南鵬』に代わるものとして，1951年（昭和26）11月に『雄飛』という名称で創刊号（第1号）が発刊された（図2）．

戦後，戦前と同名称の沖縄県海外協会と称するようになったのは，1972年（昭和47）の日本本土への復帰以後のことである．ちなみに，『雄飛』の発行奥付をみると，1951年11月発行の創刊号から1952年（昭和27）7月発行の第5号までは沖縄海外協会，1954年（昭和29）4月発行の第7号から1961年（昭和36）6月発行の特集（日伯移住協定の解説）までは琉球海外協会，1962年発行の特集（日亜移住協定の内容）および1963年5月発行の第21号から1972年（昭和47）5月発行の第29号までは沖縄海外協会，1974年（昭和49）3月発行の第30号から1989年（平成元）2月発行の第44号（最終号）までは沖縄県海外協会となっている．

戦後復興途上にあった沖縄県にあって，この『雄飛』は移民関係者や公的機関には配布されたが，

図2　『雄飛』創刊号の表紙

印刷部数が少なかった関係上，一般には流布しなかった．その内容をみると，論考や報告，海外からの通信や写真などに当時の世相を反映して，貴重な移民関係資料となりうる文献が数多くある．現存する『雄飛』は第1号（1951年刊）から第44号（1989年刊）までの44冊と，特別や特集で発行された号（1961年，‘62年，‘66年，‘70年刊）の4冊で合計48冊である．なお，発行はあったが未見のものに第6号(1953年刊で新聞か)と第15号(1957年か‘58年刊)がある．本稿では『雄飛』発刊の意義，同創刊号から第44号の主要な内容として，創刊号（第1号）および続刊号の内容の概観として，沖縄県の海外移民関係のみにしぼり，その内容が重要と思われるものを取り上げてみる．

1.『雄飛』発刊の意義

『雄飛』創刊号（1951年11月刊）の「発刊に際して」のなかで，沖縄県海外協会会長の平良辰雄（沖縄群島知事）はつぎのように述べている．

> 資源貧困土地狭あいにして，而も暴風，かんばつの天災多く，且つ人口稠密，其の上年々の人口増加は必然的に我々沖縄人をして，生きんが為に海外へ雄飛発展を余儀なくせしめたのであります．想ふに我が沖縄人の海外移植民発展は西暦一八九九年に始まり，その数十萬以上に達し，其の送金は三百萬円（昭和十三年度）超過し，我が沖縄の経済に貢献すること誠に甚大なるものがありました．
>
> 其の時に當り，我が沖縄県當局に於ても．移民の素質向上，海外同胞の保護並に連絡提携，移植民の送出促進の主意の基に，沖縄県海外協会が大正十三年十一月に設立され，従来其の目的達成の為に活躍し，よく其の任を果し，移植民の母体として貢献せることは周知の通りであります（2頁）．
>
> 終戦後我が沖縄の宿命的なこの命題を担って，一九四八年十月即ち移植民問題の解決促進といふ重大なる任務を帯びて設立され，就中海外同胞との連絡提携を密にし，鋭意其の任務達成にまい進し，着々其の実を結びつゝあることは会員諸君と共に慶びに堪へないところでありますが，本協会の任務は重且つ大にして，其の目的達成の為には，在内外同胞諸賢の御熱誠なる御援助と御協力が絶対必要であります．
>
> 第二次世界大戦漸く終り，世界の状勢は平和を愛好する人々の手により，其の燭光を見出しつゝある今日，我等沖縄人が再び世界を舞台として雄飛発展する日も決して遠くはないものと思います．此の時に當り，當協会の機関誌が其の名も勇ましく雄飛と題し，我々協会員一同の心の糧として，将又在外同胞との連絡提携の絆として発刊されますことは，時期を得たものとして誠に同慶に堪へません．希くば當沖縄協会の任務の一翼を担って飛立つ雄飛の為に，会員諸君の御援助と御協力を茲に切望致す次第であります（以上2頁）．

沖縄海外協会として再発足時の事務局長知念忠太郎の「本年度の事業概要」には，1951年（昭和26）4月5日の同協会の理事会および4月25日の第一回評議員会において，満場一致をもって承認した今後の事業計画のひとつに，機関誌『雄飛』の発刊があると，つぎのように記している．

> 戦前の沖縄海外協会には「南鳳」（引用者注「南鵬」）といふ立派な機関誌が発刊され，移民事業に相当の貢献をなして居たが，本会でも移民促進の一翼とし，今回本誌「雄飛」を発刊することにした（17頁）．

当時，沖縄群島政府経済部副部長の地位にあった知念忠太郎は沖縄海外協会を引きいる事務局長で，事務局は同群島政府経済部企画課内に置かれた．そのスタッフは事務副局長が西平賀仁，主事が玉城美五郎，嘱託が宮平弘志・比嘉吉秀・山城ヨシ・浦崎伸子の5人で計7人であった．知念事務局長はまた『雄飛』の編集者でもあった．知念の同誌創刊号の「編集後記」に，以下のように題

字と表紙についても触れた箇所がある．

対日講和の調印式が行はれた其の意義深い歳の而も同月に沖縄海外協会の機関誌が雄々しく勇しく平和の御子としてたん生致しました．会員諸氏の御期待御希望に添ひ，健やかに生長する様，我々編集員は常に念じて居りますれば，遠慮なき希望を寄せて，御援助御協力の程切に御願ひ致します．創刊号を飾る奇麗な，そして雄壮な表紙が出来ました．画は安次峰金正氏の麗筆になり，題字は群島知事平良辰雄氏の雄揮で，海洋民族を象徴し，希望の雲を迎えて帆を張り，将に船出せんと満を持して居る我々の心の姿の表現であると思はれます（78 頁）．

2.『雄飛』創刊号～第 44 号の主要な内容

1)『雄飛』創刊号（第 1 号）内容の概観

『雄飛』第 1 号:1951 年（昭和 26）11 月 1 日発行，発行所は沖縄海外協会事務局，編集者は知念忠太郎，印刷所は向春印刷（那覇市外安里），総頁数は 78 頁，口絵（写真）．

△海外移民に関するもの

①（巻頭言）“雄飛”に題す
②発刊に際して（会長　平良辰雄）
③創刊を祝す（琉球大学々長　志喜屋孝信）
④沖縄海外協会の回顧（琉球新報社長　又吉康和）
⑤創刊を慶ぶ（副会長　呉我春信）
⑥創刊を祝す（沖縄タイムス社長　高嶺朝光）
⑦本年度の事業概要（事務局長　知念忠太郎）
⑧上陸第一歩の哀愁――苦難に満ちた海外生活（理事　伊集朝規）
⑨農業移民を待つ
⑩沖縄の過剰人口を如何に解決するか（南石学）
⑪発刊に際して（副会長　比嘉秀盛）
⑫ハワイ帰省者座談会（1951 年 7 月 16 日，那覇市）
⑬移民の移動性と生活水準に就いて
⑭雄飛の翼（数田雨篠）
⑮出船の唄（志村　弘）
⑯呼寄移民に就いて
⑰（移民表）海外帰還者調（1951 年 3 月 31 日現在）
⑱（移民表）戦後海外渡航者調，外国移民調（現在外国居住者）
⑲沖縄海外協会々則，役職員紹介，事務局人要
⑳編集後記（忠太郎）

△海外移民以外のもの

①海外交渉史譚（島袋全発）
②沖縄の俚諺とデモクラシー（文学士（故）伊波普猷）
③沖縄の教育に就いて（眞榮田義見）
④琉球織物（安谷屋正量）
⑤道義のたい廃を論ず（沖縄新聞社「文学賞」第 1 位論文　仲松源光）
⑥夜明けの雨（城戸　裕）

④又吉康和の「沖縄海外協会の回顧」は，戦前沖縄県海外協会の設立者の一人であり，機関誌『南鵬』の編集者でもあった又吉が，1921 年（大正 10）頃から同協会創立の動きがあった経緯など詳細に記している．又吉は戦後沖縄民政府副知事，琉球新報社社長，那覇市長として活躍した．本文の内容は見出しとして海外協会設立まで，協会の事業 - 教育と解禁，開洋会館とあり，かれの幅広い人脈が浮かび上がる．

⑦知念忠太郎の「本年度の事業概要」は沖縄海外協会事務局長当時，海外への移民熱が，人口増加の解決策として勃興しつつある状況を見据え，つぎの 5 項目の事業計画案を示している．すなわち，海外呼寄移民の集団短期予備教育，海外協会誌「雄飛」の発刊，移民教育の普及，移民促進対策，移民会館の設立である．

⑰海外協会事務局作成の（移民表）「海外帰還者調」は戦後 6 年経った 1951 年（昭和 26）3 月 31 日現在の国・地域（22）別を沖縄県の市町村（56）別にみたものである（総合計 10 万 5,644 人）．

⑱（移民表）の「戦後海外渡航者調，外国移民調」は前者が国・地域（7）別市町村（54）別に総合計 1,553 人，後者が国・地域（12）別市町村（54）別

に総合計 5 万 1,904 人をみたものである．

⑲「沖縄海外協会々則」は第 14 条まであり，ついで「役職員紹介」「事務局人要」とつづく．

2)『雄飛』続刊号（第 2 号～第 44 号）内容の概観

戦後，沖縄県海外協会の機関誌『雄飛』はほぼ毎年刊行されていたので，続刊号だけでも 43 冊に及び，特別・特集号を加えるとそれ以上の冊数となる．本項では各冊子の内容が海外移民関係のもののみに絞り，以下重要と思われる記述のある続刊号を取り上げることにする．

『雄飛』第 2 号 : 移民地紹介特別号，1951 年（昭和 26）12 月 20 日発行，沖縄海外協会事務局，知念忠太郎編集，向春印刷（那覇市外安里），44 頁．

△知念忠太郎事務局長の「発刊に際して」は当時の世相を反映して，沖縄の人口増加と移民問題を説き，本号の内容を紹介している．

民主主義の理念が人権尊重にあるというならば人権尊重こそは生きる人間の権利であり，義務であると思います．私たちが機会あるごとに移民の早期実現を主張し声をからして海外への雄飛発展をさけぶのも帰するところは，民主主義の理念に基づく人権尊重の根本精神であり，私達が生きんが為の主張であります．一人の人間が生きんが為には一定の面積が必要であると云うことは愚論のようではあるが，一平方粁當三八七名（米国一六名，日本二一七名）の人口密度で生きている私達の現実は決して生きんが為の適当な面積とはいえないと思います．丁度沖縄の現状は大海の中で一隻の船（沖縄丸）が超満員の乗客を積んで何処へ行くともなく自然の波風に委せて右往左往して居るという状態ではないでしょうか（1 頁）．

ところが私達が声をからして「海外へ雄飛したい」「海外へ雄飛しなければならぬ」と叫び，力説して見た所で問題は相手国である世界各地が果して私達を喜んで受け入れてもらえるかどうか，即ち沖縄丸の余剰客を世界の人々が喜んで受入れてもらえるかどうかということに掛かって居ると思います．幸い最近ブラジルは私達を受入れたいという朗報が伝えられて居るし，又米国政府も特に沖縄の移民問題には関心を持っていると思われますので，私達はより一層海外雄飛への希望を新にすべきではないでしょうか．

想えば現在は雄飛する日の為の絶好の機会であり，私達はこの機会を十二分に活用し，新生移民としての襟度を堅持すべきであると思って居ります．當協会は特にこれに重点を置いて事業を進めて居り，今回特に政府経済部移民係と協力し，ここに少ない資料の中から将来可能性のある移民地の紹介をすることも，一重にこれに外ならないのであります．

本書は主として海外移住協会理事長鳥谷寅雄氏の執筆による海外渡航の手引より抜すいし，更に東京家政大学講師白石昌美氏の発表より要約したもので，決して本書で満足すべきではないと思ってをりますが，皆様が本書発刊の意を充分了解され，海外新天地への多大なる関心と一段の御研究をお願いして，発刊の言葉と致します（以上 1–2 頁）．

△海外協会事務局作成の「海外発展の沿革」は 1 頁にすぎないが，沖縄県から海外へ出た移民の略史である．それにつづき，移民地紹介として，ブラジルなど中南米や東南アジアなどへ出た日本移民全般の歴史と実態がよくまとめられている．すなわち，一ブラジル，二アルゼンチン，三中南米及カナダ（ペルー，チリー，ボリビヤ，ウルガイ，パラガイ，メキシコ，キューバ，コロンビアとカナダ），四インドネシア，五インド・パキスタン，六宝庫ニューギニアである．

『雄飛』第 3 号 : 1952 年（昭和 27）3 月 15 日発行，沖縄海外協会事務局，宮平弘志編集者，知念忠太郎責任者，向春印刷（那覇市外安里），39 頁．

△琉球臨時中央政府行政主席比嘉秀平の「移民問題について」は，沖縄の移民問題が戦前戦後を通

じて，県庁，琉球政府としてもいかに重要な政策であったかがうかがえる説得力のある一文と言えよう．

移民問題を取扱う民間団体として，沖縄海外協会の発足を見，その後遂年移民事業の研究調査並に実施に積極性を増してきたことは頼もしい事であります．琉球は土地狭隘にして人口稠密，資源稀薄にして天災の多い宿命の島でありますが，我々も祖先が遠く海外に雄渾な気宇をもって進出し，海外にその地歩を固めて来た事は琉球の歴史に明瞭に印されているのであります．我々子孫は，その偉大なる祖先の血をうけて居る者でありまして，琉球の現実の悪条件を勇敢に克服して，益々海外諸国への雄飛を志さねばならないと思うのであります．

多数の人が資源にも乏しい猫額大の土地にあくせくと呻吟していることは，決して好ましい事でなく，殊に戦後は軍使用地として相当の面積が軍に収用されて居りますので，住民の地域は愈々狭くなり，加うるに戦後海外各地からの多数の復員帰還者があって，人口は激増の一途をたどり，一層移民の必要を痛感させられるのであります．

この意味において，四月一日発足する「琉球政府」の一局たる総務局に独立課として移民課が設置され，これから本格的に政府の政策の一つとして移民事業を取り上げることになりました．移民課の仕事は，移民政策の企画に関する件，移民事業に関する件，移民についての資料に関する件でありまして，これで官民が互に緊密に提携して，より以上に強力に移民政策と事業の推進に乗り出せるわけで，まことに結構なことと云わねばなりません（以上 2 頁）．

然し乍ら，申すまでもなく移民問題は受入国たる相手国のあることであって，一方的に解決出来るものではありません．国際問題として種々の先決条件があるわけでありますが，今からその対策に乗り出さねば，時期到来を待ってしては遅過ぎるのであります．米国務省の依嘱を受けて，スタンホード大学の教授ゼームス，ティグナー氏は，昨年十一月ブラジルへ渡り移民の実状調査を遂げ，目下アルゼンチンに行かれている模様であります．この調査に當っては，在伯同胞が積極的に協力され，教授をして感激せしめて居ります事は実に有難いことであります．此の外にも海外同胞は，沖縄移民の早期実現方について其の国の政府や有力者に沖縄の実情を訴えて陳情するなど，側面的協力に対し日頃から感謝して居る者であります．

われわれはこの此の際，政府の移民課，民間の沖縄海外協会，現地の海外同胞が三位一体となり，移殖民送出の早期実現につとめ，以てその期に備え置かねばならないと思うのであります．以上所感の一端を述べ「雄飛」誌の将来の発展を御祈りする次第であります（以上 2–3 頁）．

△事務局編集室の「移民の経緯と将来」は，移民を送出するには相手国にこれを受け入れるだけの条件や態勢が整っていなければ実現は不可能であるとし，今後の移民問題を考えるに当り，明治以降の日本移民の歴史と実態を回顧している．その内容は一明治時代-ハワイ，アメリカ本土，カナダ，二大正時代及び昭和の初期-ペルー，ブラジル，フィリッピン，マレイ，蘭印，三昭和の軍国主義時代 - 満州，中国本土である．

△事務局主事玉城美五郎の「沖縄産業復興共進会における移民館について」は 1951 年（昭和 26）12 月に戦後初の試みとして開催された経済部移民係と沖縄海外協会共催の沖縄産業復興共進会の中の移民館の展示についての記述である．以下その展示の趣旨と成果，内容の項目を挙げておく．

1951 年 12 月 23 日より同月 25 日迄の三日間に亙って那覇市郊外真和志中等学校に於て，沖縄群島政府主催の産業復興共進会が盛会の裏に終了した事を，各新聞紙は等しく賞讃の辞を送っていた．それは経済部職員の熱誠と努力の結集で，関係官庁，各種団体の絶大なる援助の賜で

あって，産業面の復興可能を米軍並に沖縄全民衆に暗示を与え，奮起を促すものであった．

戦後最初の試みである此の共進会に，経済部移民係と沖縄海外協会に於て移民館を設け，移民に関する参考資料を展示して，一般大衆の教育啓蒙に資すると共に，移民促進に供し得た事を，當時者として一般に感謝するわけであります．移民館には琉球人の海洋発展図並に沖縄群島人の海外移民の分布図や人口，移民関係の諸統計表，八重山群島開拓計画図や海外関係写真，當山久三翁，大城孝蔵翁，両移民の先駆者の写真を掲載して，先輩の遺業を偲ばしめ，後輩の発奮に資し得たものと信ずる．殊に高校生，中校生や青年達が熱心に図表を記帳している姿を多数見受けられた事は，移民館に意義あらしめた（以上 24 頁）．

一琉球人の海洋発展図について，二戦前戦後の移民分布図，三移民の恩人紹介（移民先駆者當山久三翁，フィリッピン，ダバオの開拓者大城孝蔵翁），四人口密度番附表について（24–28 頁）．

『雄飛』第４号:1952 年（昭和 27）４月 30 日発行，沖縄海外協会事務局，宮平弘志編集，知念忠太郎責任者，向春印刷（那覇市外安里），38 頁．

△編集者宮平弘志の「琉球政府の発足に期待す」は，1952 年４月に琉球政府が発足したことを祝し，それに期待することを巻頭言としている．その内容は琉球政府の創設とともに公選による立法院議員も選出され，民主的政治が行われようとしているが，日本の講和条約発効とともに，その前途は多難であると指摘する．就中自立経済の確立は新政府に課せられた重大な問題で，なかでも新政府の政策の一つとして移民事業を取り上げ，総務局内に移民課を新設したことに対し，以下のように高く評価している．

「琉球住民の経済的政治的並びに社会的福祉を増進するため琉球政府を設立することが望ましいのでと云う米国民政府の意図のもと」に四月一日より三権分立の原則の上に新しい琉球政府が発足することになりました．全琉球住民のかねてから期待し，且つ要望していたところであり，住民自治への一段階として誠に慶びに堪えません．特に民主的政治の上から公選による立法院が誕生したことは最も意義深いものがあります．

然しながら琉球の現状を想いますとき，新政府の前途は決して平坦たるものではありません．国際的には講和条約発効と共にますます複雑微妙な立場におかれ，内には政治，経済，文化其の他の面に於いて解決を要する幾多の問題が山積しております．就中自立経済の確立は新政府に課せられた重大なる且急を要する問題であると思います．琉球の自立経済を考究する場合に於いて，最も大きく浮び上るものの一つに移民問題があることは周知の通りであり，移民問題が全琉球にとって如何に重大な死活に関する問題であるかは今更論ずるまでもなく，其の必要は誰もが認めるところであります．

行政府に於いてもこの移民問題の重要性に鑑み，本格的に政府の政策の一つとして移民事業を取り上げることになり，総務局内に移民課を新設して萬全を期する体制を整えておりますことは慶びとするところでありますが，これを単なる形のみの案山子で終らせるか，又は花を咲かせ実を結ばせることが出来るかは一重に琉球政府が如何に積極的に之れの実現にまい進するかにかかっているのであります．新政府の前途を祝し，其の発足を慶ぶと同時に大いに期待致すところであります（以上 1 頁）．

△琉球政府総務局長の嘉陽安春の「移民問題について」は，前記の比嘉主席発言のとおり琉球政府総務局の一課として移民課が設置されたことを受け，つぎのような構想を打ち出している．

幸い総務局は，其一課に労務課も包含しているので島内の労働需給の現状とその見透しとの綜合的な関連の下に，移民政策の構想を持ち，

之を確立して行きたいと考えて居りますが，更にまた八重山開発計画による人口配置計画と海外移民計画との綜合性が琉球全体として要求されて来るのであります．この綜合的な移民政策の構想は固より将来永きにわたる恒久的政策問題でありますが，それはそれとして，又差し迫った問題として呼寄移民の早期解決等，手近な処からの着々たる解決の努力を忘れてはならないことは云うまでもありません（2 頁）．

△恩納中等学校校長仲嶺盛文の「移植民教育について」は，戦前から沖縄県において移植民教育の問題は，人口稠密，土地狭隘，天然資源の乏しいなかで，実に大切な問題であり，具体的な切実な問題であると考える，として以下の項目の順に記述している．一移植民教育についての考え方，二移植民教育の進め方，三開拓魂，開拓精神の涵養，四勤労精神の養成，五国際人としての躾，六移植民教育の実際.

本文の後半で仲嶺は沖縄県人の移民としての資質について，古来海洋民族で沖縄人の質は優秀で，勤勉正直で頑張り強く，過激労働に耐え得る民族であると言い，大いなる希望をもって前進すべきであると結論づけている．

我々が海洋民族であり，そして我々の祖先は七つの海に雄飛し，亦現在海外にいる我々同胞は我々沖縄人の質の優秀なることを立証してくれているのであります．今こそ我々は大いなる希望を持って，来るべき海外雄飛の時を待とうではありませんか．そしてその時に備え大いに学び大いに鍛えて置こうではありませんか.

食糧船の入港が遅れると米が一三〇円になり，毎日そうめんを食べて浮かぬ顔をすることは淋しいけれど，この作は是が非でもと朝も晩も精を出して作った田が一夜の台風に吹きとばされ，ア然と畦に立つ日は悲しいけれど，嘆きはすまい．大いなる希望の生命の火を燃しませう．旺盛なる我々の生命の力を信じませう．ときは必ず参ります．私はそれを信じます．何故なれば人間なるが故に，等しく神の子なるが故に，少くとも我々があづかっているこの子一人にはかけがえのないこの子一人には大いなる幸福を与えてやりましょう．先生方も私も大いなる希望を持って！沖縄の人々よ！夢をえがけ！夢は希望の苗床である（以上 9 頁）.

△事務局編集室の「ボリビア移民に就いて」は，1954 年（昭和 29）から米国政府の援助により熱帯開拓移民として琉球政府の計画移民が開始される 2 年前の準備期間中のボリビアの気候，移民に適する農業，ボリビア国の鉱業の項目順に記され，最後につぎのようにまとめられている．

以上の様な土地であり，我々に対しては従来から好感を持っている国柄であるので，移民地として理想的なところの一つである．その上鉱工業方面が将来発展の見込があるから技術者又は熟練工としても是非考えるべきと思う．近い内に沖縄にあるペルー二世がこの地に呼寄移民として入植することになっているが，彼等の成功を祈ると同時に，一般自由移民が一日も早く行ける日を切望してやまない（12 頁）.

△事務局編集室の「南米の楽園アルゼンチン」は，在亜日本人総合委員会より沖縄海外協会宛炭坑夫 300 名の移民募集の朗報がもたらされて以来，アルゼンチンに対する一般の関心が高まりつつある時期に，同国はどんなところだろうかと紹介している．その内容は住民，最近の事情，経済事情，在留邦人，将来の移民の項目の順に記されている．そのなかの最後の 2 項目を取り上げ，アルゼンチンにおける沖縄県系人の実態をみてみよう．

日系人の職業は花造り，蔬菜作り等の農業関係の他は洗たく，カフェー，料理店等都会の小商人が多い．これはブラジルと異なり，在ア邦人の多くは正式に農業移民として来住したものでなく，隣国等から流れ込み，定着した者によって構成されていた関係による．

同国の一般人は日本人の正直さと勤勉さを高

くかい，親日的なふんいきの中に恵まれた生活をしていることは何よりである．ペロン現大統領も極めて親日的で，花造りの邦人の依頼に応じてその子供の出生に対して，その家を訪問して名付親になったり，花屋の娘が四名溺死した事件に対して，ブエノスアイレス市葬をもってしたことなどはその一例である．アルゼンチン在留日本人は八千人位居るが，その七割は沖縄人である．

この国は元来移住民によって開拓せられ，しかも現在労力不足に悩んでいるだけに，世界各地より移民を要求しており，特に技術移民，農業または鉱山移民が有望である．生活の安定，物資の豊富と廉価，そうして我々の活躍すべき新天地が，この国の数々の職場にまっており，特に親日的気風の濃いことは何よりも心強い．南米の楽園アルゼンチンは，移民が許可されたときは好適の移住地となるであろう（以上 22-23 頁）．

注

1）瑞慶覧長仁（1983）「沖縄県海外協会」『沖縄大百科事典』上巻，pp.463-464，沖縄タイムス社．

2）最後の沖縄県海外協会会長西銘順治（1989）「ごあいさつ」第 44 号（最終号）p.1，沖縄県海外協会を参照してほしい．

3）仲村権五郎（1925）「海外移民の選択」は，石川友紀（2015）「第 1 章ハワイ・南北アメリカ　第 2 節アメリカ合衆国本土」『浦添市移民史』本編，pp.70-72，浦添市教育委員会で紹介した．

4）湧上聾人編（1929）『沖縄救済論集』改造之沖縄社の内容の一部を構成している．

5）湧川清栄著（1953）『時代の先駆者當山久三 - 沖縄現代史の一節』はハワイ・ホノルル市で発行された．日本では 1972 年に東京の太平出版社から『沖縄民権の挫折と展開――當山久三の思想と行動』および 1973 年にその再版『當山久三伝』が発行されている．また，石田磨柱（宜野座通男）著（1990）『モーキティクーヨー當山久三』（私家版，秋田文化出版社印刷）もあり，かれに関する通説を新資料の発掘により誤謬を正している．このほか當山久三の伝記に関しては，沖縄現代史の偉人の一人として，関連資料は数多くある．ちなみに，石川友紀（2000）「沖縄県移民の父・當山久三に関する文献目録」『琉球大学法文学部人間科学科紀要　人間科学』第 5 号，pp.171-175 を参照．

6）注 3）と同じ『浦添市移民史』本編（2015 年刊）pp.33-34 で，太田朝敷の同論考の一部を引用してある．

（本稿つづく）